

同窓生の結束の象徴「あおぞら会」



「あおぞら会にもっと若い世代も入ってほしい」と
小口弘毅さん(左)と齋藤一文さん

甲府一高は同窓会の結束が強い。それを象徴するの一つが「甲府一高あおぞら会」だ。山梨県北杜市で難病の子どもとその家族のためのキャンプ場を建設し、運営する「みんなのふるさと夢プロジェクト」を同窓会の有志で応援している。

神奈川県相模原市の小児科医、小口弘毅さん(64、1970年卒)は計画当初から携わっている。小学校からの友人、齋藤一文さん(64、70年卒)は会の会計責任者としてサポートする。

甲府一高の一番の思い出は、2人とも学校から長野県小諸市まで100キロ超の山道を歩く「強行遠足」だ。小口さんは、2年生のときに歩ききった。「当時はスニーカーもまだ悪くて、まめができて大変でした」と懐か

しむ。

一方、齋藤さんは1年生のときは飛ばしすぎて疲れ果て、2年生はゆっくりに歩きすぎて時間切れ。いずれもリタイアだった。「同窓会で大勢が集まると、今でも小諸まで行った、行けなかったで、優劣を語るんですけど」

小口さんは北里大学医学部に進学。同大病院の新生児集中治療室(NICU)で長く診療、研究にあたり、2000年に小児科クリニックを開業した。「開業してNICUで治療を終えた子どもたちの退院後のサポートができるようになった」

11年、恩師の小児科医らと、認定NPO法人難病のことも支援全国ネットワーク」の事業の一つである夢プロジェクトを立ち上げた。「日本には難病の子どもたちが気持

ちよく過ごせる宿泊施設がない」との思いからだった。

ロッジが建つキャンプ場は「あおぞら共和国」と名付けられた。今では1〜4号棟が完成し、50人が宿泊可能だ。ただ運営には多くの費用がかかる。「どうしたら大勢の人に協力してもらえるか」と思案していたとき、甲府一高の東京同窓会の集まりで講演する機会を得た。この講演をきっかけにして「甲府一高あおぞら会」が15年2月に発足した。現在、同窓生を中心に約180人が会員となっている。

齋藤さんは立教大学を卒業して長く都銀で銀行マンとして働いた。定年退職していた齋藤さんを「熱烈ラブレター」で説得したのは、あおぞら会の発起人の一人で同級生だった女性。口説かれて会計を引き受けた。

「銀行に勤めていたから会計ができるって、みんな短絡的に考えるんですから」。ちょっと困り顔を見せつつも、月ごとの決算で会のお金をきっちり管理している。

あおぞら会は、毎年4月下旬にチャリティーウォーキングを主催している。「これも強行遠足の流れです」と小口さん。今年には214人が参加して新緑の中を歩いた。